

第32回泌尿器科漢方研究会学術集会

代表幹事:堀江重郎(順天堂大学大学院医学研究科泌尿器外科学)

日時:2015年6月20日(土) 13:00~18:05

会場:コクヨホール(東京都)

ブシ(附子)を含んだ漢方の膀胱痛に対する 作用機序の基礎的解明と臨床的検討

山梨大学医学部 泌尿器科¹⁾、山梨大学医学部 薬理学²⁾
○土田 孝之¹⁾、宮本 達也¹⁾、山岸 敬¹⁾、吉良 聡¹⁾
小林 英樹¹⁾、武田 正之¹⁾、柴田 圭輔²⁾、小泉 修一²⁾

ブシ(附子)を含んだ漢方の作用機序を基礎的、臨床的に解明し、新たな治療法開発の糸口とすることを目的とした。長期的に有効な治療法はあまりない。

膀胱痛の病態として、神経障害性疼痛が原因のひとつとの仮説をたて、ブシ(附子)の効果について検討した。難治性の神経障害性疼痛患者に対してブシ末を含む漢方薬を用いて有効なケースが多くみられているが、神経障害性疼痛に対するブシ(附子)の鎮痛作用メカニズムについては、その標的細胞や分子などは不明であった。

当大学薬理学教室にて、神経障害性疼痛の分子病態を解明することを試みている。神経障害性疼痛モデルマウスの脊髄後角では、ミクログリアだけでなくアストロサイトの活性化が惹起されること、また活性化アストロサイトも疼痛を誘導する原因細胞であることも報告され、神経障害性疼痛におけるアストロサイトの役割にも注目が集まってきている。神経障害性疼痛におけるブシ(附子)の鎮痛効果について調べるため、神経障害性疼痛モデルマウスを用いて検討した。

その結果1.ブシ(附子)は形成期に鎮痛効果を示さず、慢性期においてのみ有意な鎮痛効果を呈すること。2.形成期は活性化ミクログリアが、慢性期には活性化アストロサイトが疼痛を引き起こす原因細胞となっていること。3.ブシ(附子)はアストロサイトの活性化を抑制することによって慢性期の疼痛を抑制している可能性があること。ブシ(附子)によって活性化アストロサイトを脱活性化するが示唆された。また臨床的には、2008年から間質性膀胱炎患者に対してのブシ(附子)を含む漢方による治療を開始し、膀胱痛に対して劇的な効果を認めている。

漢方治療により再度の膀胱水圧拡張術を回避できるようになってきており、漢方治療のここ数年の治療結果について提示し、臨床的效果についての考察を述べる。